



読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

40代をふりかえって

金沢医科大学 皮膚科 八田 順子

主人の転勤で金沢に来て7年半になります。縁もゆかりもない金沢に来た時は、子供達もかなり不安だったと思いますが、出産後しばらく家庭に引っ込んだ後、母校の皮膚科に入局し、その後一年あまりで転勤、他大学での勤務になった私にとってもかなりのストレスではありました。当時、働かない選択肢もなかった訳ではありませんが、経済的にどうしても苦しくなりますし、適当にバイト生活といっても、あまりに長く家庭に引っ込んでいたものですから、バイトをするのも不安がつきまといます。まともな医者になれるまで頑張るしかありませんでした。そんな緊張と不安もあってか、初めて山側環状線から遠目に見た大学は、雲を背景にして浮かんでいるようにも見え、まるで天竺に行くようだと思ったものです。

当時小学校低学年だった二人の子供は、今や高校生となりました。途中学習、生活態度で悩む事も多く、自分が仕事復帰した事が子供達にとってはマイナスだったと思い、一旦仕事を辞めようかと思った事もありましたが、勤務先など色々なご配慮をいただくことで、これまでなんとか続けてこられました。そして、この春、約四年半ぶりに大学に戻って来ました。久しぶりに戻った大学は、もうあの頃のような、行くだけで緊張する場所ではないのですが、少しゆっくりとした外来に慣れてしまったこともあり、また大学ならではの難しい症例も多く、毎日外来で四苦八苦しています。皮膚科に入ってからの年数を考えると、当然テキパキとさばけなければいけないのですが、なかなかそれがうまく行かず、4月に戻ってからしばらくは毎日落ち込んでおりました。そんな私を見て主人は笑います。その年なら、すごろくでいうと、いわゆる“上がり”の状態、無気力になってくる人もいるだろうに、まだそうやって毎日悩んで勉強させてもらえるのはとても有難く幸せな事だと。

言われてみればそうかもしれません。毎日毎日そうやってこれまで過ごして来た事で、今振り返ってみれば、こちらに来た当時よりは、わずかではありますが、成長している自分がいます。

四十の手習いと言われながら皮膚科に入り、四十にして惑わずどころか、恐いまくりの日々を過ごしてきました。これから来る50代もどうなる事やら、先も見えませんが、今日の前のできる事を粛々とやる、それしか道はないと改めて感じる今日この頃です。